

かささぎ通信 第118号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 10月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年九月「森三郎の作品を読む会」では、「赤鬼青鬼」(『赤い鳥』1933.1)と「青鬼赤鬼」(少国民文芸選『かささぎ物語』1942.8)「帝国教育会出版部」の比べ読みをしました。その後「蘆刈(あしかり)」(『うぐひすの謡』1943.8 拓南社)所収)を読みました。

『赤い鳥』(一九三三年一月号)に掲載された「赤鬼青鬼」については二〇一四年七月発行の「かささぎ通信」第25号で取り上げました。

秋のある夕、下男の駄六は主人から、隣村まで菊酒を届けるように言われます。隣村へは、夜になると鬼が出るという噂の地蔵山の峠を越えなければならぬので、明日の朝にしてくれと頼む駄六と、せつかくの菊酒だから今夜のうちにと主人との掛け合いが軽妙です。菊酒は重陽の節句の日に楽しむ酒と言われますが、今回の「森三郎の作品を読む会」開催日はちょうど九月九日、しかも次の日が中秋の名月というこの話を読むにはピッタリの巡り合わせでした。

三郎は「菊酒」を「菊の葉を入れた菊酒といふ酒」と説明しています。前回読んだ時は、これは「菊の葉」ではなく「菊の花」の校正漏れであろうと考えました。しかし今回『かささぎ物語』所収の「青鬼赤鬼」でも「菊の葉」になっており、しかもその年も菊酒が上手に出来たので下男に菊酒を一桶持たせるといふ趣向ですから、森三郎は「菊酒」という特別な醸造のお酒をイメージしていたのかもしれない。お酒にまつわる話としては、二か月後の『赤い鳥』一九三三年三月号に三郎は「猿酒」を発表しています。そこに出てくるお酒は、昔から話に聞く猿が貯蔵した果実からできたお酒です。一月号の「赤鬼青鬼」創作の段階ですでにそういう特別なお酒にまつわる話を意識していたとも考えられます。

ところで童話のタイトルは一方は「赤鬼青鬼」、もう一方は「青鬼赤鬼」と語順が違っています。『赤い鳥』所収作では、先ず駄六が赤鬼(実は面を被った隣村村長の下男・富士松)に出遭い、次に青鬼の面を被った駄六が富士松を脅かすという話の展開通りの順番で「赤鬼青鬼」というタイトルです。『かささぎ物語』所収作は、人物の登場順に、その人

の被った鬼の面の色を並べてタイトルを「青鬼赤鬼」としています。しかしそのことにそれほどの意味は無いように思います。むしろ、菊酒を飲み干していい機嫌になった富士松の歌う歌を「ざざんざ ざんざ 浜松の音はざんざ」と、足利義教が歌ったという歌にしたり、体言の並列で叙述に勢いを付けたりというように、読者の対象を『赤い鳥』読者層より少し上に置いている点に特徴が感じられます。

この話は太郎冠者が偽りの武勇談を主人にする狂言「空腕」を基にしたであろうことも、「かささぎ通信」第25号に書きました。『かささぎ物語』所収作の方が、狂言に近いテンポで話が進行しています。

次に読んだ『うぐひすの謡』所収の「蘆刈」は謡曲の「蘆刈」をヒントにしたと作者自身が「あとがき」に書いています。

若い妻の尾花(おばな)と夫の葎丸(よしまる)は一月前に男の子を亡くしてから互いに強情を張っています。妻が、河原に生えるのは蘆(あし)だと言えば、夫は葎(よし)だと言って譲りません。尾花は自分の間夫婦別れをして、都へ上って乳母奉公に出ることにします。都で薄(すすき)と名を変えて大商人の家で乳母として働き、年に二度、夫のところにお金を送って、三十年という年月が経ちました。その間、夫からは何の便りもありませんでした。薄は供のものを連れて夫のところへ帰ることにしました。村に着くと、供の者は「蘆刈の翁」と呼ばれる老人から葎を買ってくれと頼まれます。妻にはそれがかつての夫であることが分かりました。夫は供の者が「これは葎(よし)じゃないか」と言う。「蘆でござる」と、かつて妻に言ったこととは反対のことを言い張りま

す。それは夫の悔いと、妻に対しての謝罪の気持の現れなのでしょう。童話と言うには少し難しい話でしたが、葎と蘆、尾花と薄という同意語の言葉遊びを主眼としているように思います。

次回予定 二〇二二年十一月十一日(金) 午後一時半~三時半

①読み比べ「うんすんガルタ」(『赤い鳥』1933.2)所収作と『かささぎ物語』1942.8)帝国教育会出版部所収作)

②「波の鼓」(『うぐひすの謡』1943.8)所収作)